



「おっちゃんこ」で一休み ベンチプロジェクト

地域で活躍 - 京極町男性の会 -



まちに設置された「おっちゃんこ」

平成31年に、地域の男性高齢者数名と社会福祉協議会が、高齢男性の社会参加の場づくりのために「どうしたら男性は地域に出てくるだろう」という問題について話し合いを重ねました。



会員の皆さん

話し合いの経過から「あまり決め事はしないで俺たちが好きなこと、面白いと思うことをして集まろう」をモットーとし、70代から90代の7名で『男性の会』が生まれました。活動の輪は広まり現在は9名で活動しています。

これまで様々な活動を行ってきましたが、特に注目する活動としては令和3年から始まった「ベンチプロジェクト(※おっちゃんこの作製)」です。

地域の高齢者から「買い物や通院の時、まちの中でちょっと一休みする場所がない」という声があり「俺たちのできることなら力になりたい」という気持ちから活動がスタートしました。現在、町内の8か所に手作りの「おっちゃんこ」が設置されています。地域住民の認知度も広がっており「スーパーや病院の途中に一休みする場所ができて助かっています」「お年寄りのためにベンチを作ってくれてありがとう」などの感謝の声が聞かれます。「興味があったらまずは活動の様子を見に来てよ」と地域の高齢男性に向けて柔軟な受け入れ体制であることも男性の会の魅力の一つです。「これからも地域の高齢者の困りごとに対して相談に乗っていききたいし、趣味や得意なことを続けていきたい」と話されている男性の会。益々のご活躍を期待しています。



「おっちゃんこ」の作製風景

後志地区ボランティア研修会

コロナ禍のなか3年ぶりに、6月4日と11月23日に、倶知安町のホテル第一会館を会場に、後志管内のボランティア団体の関係者が多数参加され後志地区ボランティア研修会が行われました。

6月は、株式会社明治北日本支社の中村仁美さんに「命を守る“水、見直そう！水分補給・皆さん水分足りていますか？」

11月は、日本風呂敷文化協会の横山芳江さんに「防災に役立つ風呂敷講座 いのちを守る一枚の布の魔法」と題しご講演をいただきました。

また、研修会の全体会のなかで、6月は「地域に根ざすボランティア活動と役割」、11月は「ボランティア活動にはどんなものがあるの？」をテーマに貴重な意見交換が行われました。



つながり元気、を大切に

黒松内町 サークル小鳥のうた 成田 志津代



ボランティア研修会に参加して、同じ目的を持った方々と、久しぶりに顔を合わせ会えたことが何よりの喜びでした。

講演のテーマは「命を守る“水、見直そう！水分補給」でした。改めて人間の身体の半分以上が水であることは知っていたつもりでしたが、その身体の水の貴重な役割を再認識いたしました。

コロナ禍のなかで、日々の生活は、自粛生活が続き、気付かぬうちに誰もがフレイル（虚弱）の前兆のきざしが現れ、私も例外なく染まりかけていました。子供たちの体力の基準値も低下をたどっていることを知り、見通しのない状態のまま向かっているように見えます。コロナ前の世界と私たち、そして長く続いたウィズコロナの今、人と人との触れ合いがどれ程大切だったかが明らかになってきました。

私自身、車中心の生活でしたが、股関節の手術をしてリハビリのために、今は一日1万歩を目指しウォーキングをしています。地域の方々との交流も深まり、フットワークが軽くなり身体を動かすことがとても楽しみになってきました。“つながり元気、で地域の方々を見守りできるような結びつきになりたいと思いました。

後志地区ボランティア連絡協議会 会長 小野 幸子

「ぽてとつうしん」を発行して、今年で第58号になります。

日ごろから後志地区ボランティア協議会の活動に、ご理解とご協力をいただき厚く感謝を申し上げます。

令和4年度の事業については、総会と年2回の研修会を、コロナウイルスの感染対策を行い開催することができ多くの方々の参加をいただきました。

また、研修会の全体会において、ボランティア活動について、各団体との意見交換が活発に行われ実りの多い研修会となりました。

ウィズコロナが続き、皆さんのボランティア活動は、さまざまな制約を受けていますが、そのような中でも、お互いに支え合いながら少しずつ前に向かって活動を進めることが大切だと思っています。



「シンプル・イズ・ベスト」

北海道倶知安高等学校長 谷川 敬一

後志地区ボランティア連絡協議会の皆様には、倶知安高校が日頃よりお世話になっております。お礼と感謝を申し上げます。

さて、研修会での私の感想は「シンプル・イズ・ベスト」ということでした。「一枚の布の魔法」と演題にありますように、たった一枚の布が必要性に応じてどんどん変化していくその様子は、まさに魔法のようでした。一枚の布というシンプルなものだからこそ、奥行きが深く、可能性は無限大ということを実感しました。また、「包む・結ぶという単純なことだからこそ使い道はたくさんある」ということも理解しました。印象的でしたのは「テレビで、昔見ていた泥棒の風呂敷はあんなに大きかった」ということでした。少し考えれば「風呂敷にも大きさに違いがある」ことくらい分かりそうなものですが、風呂敷に対して固定観念を持ち、これまでは使ったことがなかった私にとっては発見でした。さらに、風呂敷の柄にも美しいものがあることが分かり、新鮮な驚きでした。

研修会の2日後に本校の修学旅行があり、引率をしました。その際に、「旅行に行く時に風呂敷を使うと、スーツケースの中を整理できてスペースをうまく作れる」と講師がおっしゃっていたので実行してみました。おかげさまで、いつもは乱雑なスーツケースの中身がすっきりしました。

講師の横山様の「風呂敷を使うきっかけになったのは、震災で困っている人にこんなふうに風呂敷を使うと便利ですよと伝えていたら、人が集まってきた」というお話が私の記憶に残りました。防災に役立ち、普段の暮らしを豊かにしてくれる風呂敷の可能性が今後とも広がっていきますことをご祈念いたします。



「わっか」スタート～1年を振り返って

赤井川村社会福祉協議会

令和3年4月から有償ボランティア「わっか」が活動を開始して、定期的な調理、掃除の利用や、必要な時に日曜大工などを利用していただいています。

ボランティアの課題としてボランティアスタッフの確保があげられます。

赤井川村は農業が盛んで本業が農家の方が多く、農繁期の夏場はボランティアの確保が非常に難しい地域です。

そのため、ボランティアの調整は電話で行っていましたが、断る際の気まずさと一定期間のボランティア確保の難しさが悩みの一つになっていました。

そこで、赤井川村たすけあい隊（生活支援体制整備事業協議体）の中で、スマホのアプリでボランティアの調整ができれば、依頼の電話を断る気まずさがなくなり、依頼者の負担も減り、ボランティア参加がより身近になると考えました。

また、今までボランティアへ関心があっても連絡の煩雑な対応などにより参加が厳しかった人がアプリをきっかけにボランティアを知ることや関心につながるのではないかと思い北海道情報大学に協力を仰ぎ、学生がカリキュラムの中でアプリを制作してくれることになりました。

このスマホのアプリを利用することによって、新たなボランティアスタッフの確保やボランティア調整がスムーズにいくことを期待しています。



■ 癒しの里で50年 高齢世帯へ配食サービス

「美味しいお弁当」笑顔とともに手から手へ

黒松内町ボランティア連絡協議会 ボランティアセンター

昭和47年、「黒松内つくし園」と「緑ヶ丘老人ホーム」の二つの社会福祉施設が、地域に開かれた施設づくりを目指して配食サービスは始まりました。

初めての配食サービスで20食を届けた時の利用者の笑顔からボランティアは続いてきました。

途中からお弁当を手渡す安否確認の部分は黒松内町ボランティア連絡協議会に託され、令和の今も配食サービスは施設と同協議会のボランティアセンターの二人三脚で続いています。



利用者へお弁当を手渡す
ボランティアの花田忠雄さん

現在7名で行われている配食サービスの一番のやりがいは、利用者、ボランティア、つくし園のスタッフ全ての人の交流と笑顔です。

ボランティアの中には配食サービスが始まってからずっと携わっている方もいます。続けるコツは「自分の余裕がある中でボランティアの時間を楽しく過ごすこと。」利用者の方から元気をもらい次のボランティアも楽しみになる。このつながりが50年間続き、黒松内町の配食サービスは地域に根付いていきました。

ぽてとつうしん 第58号

発行/後志地区ボランティア連絡協議会

〒044-8588 虻田郡倶知安町北1条東2丁目 後志合同庁舎

北海道社会福祉協議会 後志地区事務所内

TEL. 0136-21-2945

2023年3月